「ボルシェヴィキ派」政治組織総括

一、はじめに
二、BL派と「10・26」――何がとわれたか
三、一一月決議とBL派内部の対立、分立
四、党の革命における位置そう失
五、革共同イズムの世界
六、ブント主義と党
七、革命党史観

[illegible]

一、はじめに

我々、とりわけ「ボルシエビイキ派」の責任者としての私は、東大闘争及び四、二八闘争出獄同志に対する、まず、次の二つの点についての総括――自己批判からBL派総括の現実的端緒を切り拓く。

一つは、昨秋安保決戦において、我々は、獄中諸同志の期待と要望にこたえることが出来なかつたことである。もし、我々が、昨秋安保決戦における我が同盟の全てを、（必然性）として語るとするならば、それは、度し難い自己弁護というものであろう。「ブント」の呼称のもと、日本革命的左翼の最左派として、六七、一〇、二八にはじまり、六八、一〇、二一、東大闘争、四、二八闘争等、安保闘争をけん引してきた我が同盟が、昨秋安保決戦において、その革命的声望に値する戦闘的指導を当初的意図において貫徹しえなかつたこと、――我々、なかんづくボルシエビイキ派の責任者としての私は、このことに痛苦を感じている。

しかも、二つには、この間における「党の革命」が、我々によつてではなく、まさしく出獄諸同志の力量によつて圧倒的に進められてきたということ――もちろん、「党の革命」を提起した我々は、昨年来、この闘いをおし進めてはきた。だが、「党の革命」は東大闘争及び四、二八闘争被告諸同志の出獄をもつて、ダイナミックスを回復し、そのテンポを早めることを得、のみならず、この「党の革命」は出獄諸同志に先頭を担われることによつて遂行されてきたのである。現在、このことの総括が厳しく問われている。

BL派は、「総括」を、いわゆる同盟全体の問題としてストレートに「普辺化」させることなく、又、他フラケ批判やフラク的諸事情論をもつて「相対関係化」させることなく、ましてや無媒介的に純粋理論問題の天上界におし上げてはならず、まさしく、まず、BL派自体の（とりわけ、その政治組織活動の）主体的内在的総括。自己批判として獲ち取る。

BL派が、九回大会後、同盟中央中枢諸機関の重要任務を引き受けたことをふまえる時、BL派フラクの政治組織総括は、広く同盟内に明らかにされるべきものとしてある　だろう。なお、我々BL派自体の政治組織総括は、九回大会路線の現論的総括、政治組織的総括（これらはすでに、部分的ではあれ、各CC議案討論として行われてきているが）、及び同盟諸フラクとBL派、更には、昨秋安保決戦全体の階級闘争的総括にむけた出発点であることを明らかにしておく。

二、BL派フラクと一〇、二一――何が問われたのか

「……楽観的にドイツではことはまだ永い間そんなに

悪化はしないのだといつて自ら慰めているとすれば、私は彼にこう呼びかけねばならない。Do ne ne bUla neRRaTUR!（ここで報告しているのは君のことなのだよ！）と。」

（資本論第一版序文）

わが「ボルシエビキ派」は、一〇、二一を前に分解した。

六月末のBL派結成からわずか百日余、我々は、さしせまる一〇、二一攻防戦を前に、痛恨の分解におちいつたのであつた。

BL派は、なぜ分解したか。

シ烈な同盟内闘争は、BL派分解の条件を成してはいても原因ではない。分解の原因は、わがBL派の内実そのものにあつた。

六九年四、二八以降、わが同盟は、内的亀裂を急速に深めていた。そして、わが同盟への破防法攻撃は、この亀裂を決定的なものにしたのであつた。

破防法適用によるタイホ状が出ている時きれた六名――さらぎ、松本、久保井、一向、田宮、三上――の地下潜行は、そのまま、同盟内論争のタテ割系列化を生みだし、五月の三中委流会は、更に、これに拍車をかけることになつたのであつた。実際、五、六月、同盟は、編集局と組織局の活動によつて、かろうじて党的統一性を保つていたにすぎなかつたといつて過言ではない。

一体、このような状況の中で、BL派は、どのような位置をもつていたのであろうか。

同盟は、一方において、「一〇月武装ホウ起、臨時革命政府」を掲げた「赤軍派」の極めて活発な活動をうみだしていた。

そして、他方において、「八派共同声明、反帝統一戦線」―「自立―反乱型革命」路線の同盟内全共闘派（叛旗＝情況派）の結束を急速に生みだしつつあつた。

そして、全同盟員が、徐々に、やがて、火急に、このどちらかの撰択を問われはじめたのが、「六月」であつた。一向か、松本か、松本か、一向か。

BL派は、まずなによりも、かかる二者択一として全同盟員が撰択を問われている同盟の現実を、なによりも危機としてハ握した。危機の突破は、撰択の拒否でなく、革命的フラクの結成にこそある。「――がない。」「――ではダメだ。」「――が足りない。」等々、例による愚にもつかないマイナスの結合は、我々の好むところではなかつた。我々は積極的に新たなフラク結成を開始した。

「ボルシエビキ派」――その名は、革命への執念、革命党確立への狂おしい信念である。

我々は、フラク結成にあたり、まず右派との対決をより鮮明にした。「軍事―軍団」建設をテコとした党、階級の飛躍の火急的必要性について何ら主体的に把握することの出来ない右派に対して、我々は、憎悪の念を禁じえなかつた。

だが、戦闘的伝統を誇る我が同盟内論争の基軸は、左派内論争としてしかありえない。BL派と赤軍派との対決が、不可避となつた。それも、赤軍派の極めて急ピッチな別党コース的党内戦術の推進によつて急進化しつつあつた。しかし、我々は、物量的にも、組織体制的にも圧倒的に立遅れていた。

赤軍派指導部は、昨夏における敗北を、官僚主義に敗北した、と総括している。だが、これこそ、自己の敗北の理論的切開を回避するための俗流自己弁護論以外のなにものでもない。実際、すでに党組織論的には完全マヒ的解体状況にあつた我が同盟にあつて、強力な官僚体制？いや、赤軍派こそ、同盟中央各級機関内の相対的多数派であつたのだ。

BL派は、フラク規模的には、最も少数のフラクであつた。

赤軍派は、形式ではなく、「臨時革命政府、十月武装ホウ起」の内容論争において敗退したのであり、赤軍派が言うように各同盟員は、形式主義的石頭だつたのではなく、むしろ、この無バイ介的盲目的な内容論争において、いわば、決断的に自己の立場を表明していつたのだつた。そして、加うるに、赤軍派の別党コース的党内闘争戦術が、彼らの機関召還主義を生みだすことによつて、敗北を致命化したのだ。

BL派は、その力量を拡大し、我が同盟内の最精鋭部分＝首都学生細胞諸同志と命運を共にするフラクに成長した。BL派は、その勝利を党組織論的に定着していつた。

だが。BL派は、結成後百余日にしてなぜ分解したのか。

我々の内的危機は、まず、戦術論争として発生した。ブルジョアジーは、大学立法強行成立を突破口に、八月以来、我戦線に全面的攻撃を加えてきたが、我々は、かかるブルジョアジーの先行的攻撃の前に、すでに大きく後退を余儀なくされることになつた。

八月広島大、九月早大トリデ攻防戦は、東大安田講堂攻防をもつて開始された全国学園に占拠闘争が官憲の圧倒的な物理力強化と大学立法成立による大学当局の権力への全面的屈服の中で最早、不可能であることを鮮明にしたのであつた。我々は、安保闘争の陣地としてあつた各学園から次々に追い出されていつた。すでに九月末段階で、我が安保闘争は、かかる権力の先

行的にログアウトによつて深さなき広さの闘いにおいられた。宮憲は、安保決戦の前段先行戦において勝利を収めていつたというわけだ。

だが、かかる敗退的現実は、「革命闘争の時代とは革命党の時代である。」ことを明らかにして我々の主張の検証でもあつた。すなわち、旧来のごとき、大学という市民社会内での「安住地域」に依拠し、いわばかかる便宜におんぶされた闘争の推進が、攻防激化、非合法闘争化において、全面的破タンを宣せられたのであつた。我々が「革命」への飛躍をかちとろうとするとき、大学等は「場」ではあつても拠点ではなく、「拠点」の地理性概念から組織性概念ーーー拠点としての革命組織。それも地区的細密構造と機動性をもつた革命組織ーーーへの本来的転換を必ス不可欠とする八、九月先行戦は、我々が九回大会獲得過程を通して予見した「軍事と地区党」の意義を鮮明にしたものであつた。

しかし、それにしても、大学トリデをめぐる前段先行戦における完全な敗北は、安保決戦にむけて措定した我々の当初的戦術貫徹の不可能に直結するものであつた。この危機は、BL派をとらえた。BL派は、フラク結成後、はじめての内部論争に入つた。

「一〇月闘頃からの神田占拠、陣地構築ーー陣地からのカスミケ関進撃としての一〇、二一」なる当初の戦術をめぐつて、BL派内部では、際限のない論争がくり返された。一方における当初戦術への固執、だが、そこに見られる主観的願望と現実的力関係の等置、他方における絶望、全てをなげすて、決死隊〇〇名建設ーー首相官邸突入一本に戦術を縮少純化することの主張等。それは機動隊との現実的力関係の劣勢顕在化の中で各メンバー互のイラ立ちでもあつた。BL派は、しかしかなりの日時を要したとはいえ、この内部論争を通じて、新らしい戦術ーーー戦術ダウン決定を行ない新たな意志統一をかちとつていつた。

だが、ここにおいて、BL派は、すでに、部分的な分解を余儀なくされた。自己をあえて単純化して端的な表現をするならば、戦術のみをもつて結成されたものは、戦術の不一致によつてたちまち分解するということだ。もちろん、安保決戦をめぐる戦術問題は、日常的戦術と同一にとらえることは出来ないが、BL派はこの戦術再編の論争において、フラクの質を問われることになつたのであつた。

すなわち、安保決戦をめぐつて外化した六、七月の同盟内論争において、我々のフラク結成が、この論争への直接的解答のみならず、論争の根底への波及、すなわち、思想的理論的一致、党的一致にまで深められたものとしての戦術一致としてなしとげられなかつたことの根本的脆弱性が、戦術不一致ーーたちまち混乱

として表面化したのであつた。たしかに、BL派結成の基準は、戦術論争への単なる直接性ではなかつたが、しかし、もつぱら、かかる直接性を基準とするものであつた。そして、BL派内戦術論争を通して表面化したこの根本的脆弱性は、更に、RG問題、いわゆるRGの危機をつくりだすことになつた。

我々は、RG建設にむけて、我々内部の最も戦闘的献身的な諸同志を配置した。BL派は、Y委員長をにない、RG隊長をひきうけた。RG隊長のもと、社学同首都の精鋭部分はRGに結集した。

だが、RGは、まず、支部及びそこにおける組織活動の必要性との自己矛盾におちいつた。

大学トリデが次々に解体され、学園内における我々のヘゲモニーが、危機にさらされている中にあつて、精鋭部分のRGへの移行は、直接的には、召還主義ーいわゆる階級形成の放棄ーのごとき感を呈し、実際、我々自身の限られた力量にあつて、党の軍隊建設と反戦全共闘の領導の同時的遂行は、苦難を極めるものであつた。

加うるに、情況、叛旗派がRG建設に応じず、全員を各支部に温存し、そこでの「部隊形成」によつて、量的拡大をとげて党内闘争にたちむかつてくることの対極において、我々は、情況、叛旗派の質の低次性を見抜き、左翼的ホコリをもちながらも、やはり、その量的規模に危機意識をもつたのであつた。一〇、二一軍事攻防戦において断コたる突出をかちとるべく武術訓練をはじめ、共同生活をもつて、一〇、二一へむかいつつあつた我々のRGの精鋭同志諸君は、ここに安保決戦の展望、RGの意義についてあらためてとわれることとなつた。

攻防戦におけるRGの画期的意義については、明白であつた。

RG移行＝支部弱化の問題があつたが、我々は、RG建設優先の決断を行なつてきたのであつた。

だが、党的展望については、我々は危機的であつた。「一〇、二一で左派が大量逮捕され、月和見の右派がその後の同盟を占拠するのではないか」

「RGが闘つても、その戦闘が党的に継承発展させられないのではないか」ーーーこのことが、はつきりケ念され、これを払拭する党的展望が求められた。

BL派は、この党的展望について、出しえなかつた。いや、正確に表現しよう。我々は党的展望について全体的一致をかちとることが出来なかつたのであつた。すなわち、BL派は、安保決戦への戦術的一致。再編一致をかちとつてはいても、綱領的＝党的次元における一致のあいまいさのゆえにその戦術貫徹の成果を、

階級闘争、党内闘争の二重の苦闘を通して党形成としてかちとつていく展望については、フラク的団結にまで高めきれていなかつたのであつた。それは、より具体的なリアルな問題として、一〇、二一に、直接、戦場に出る同志と、同盟内諸機関に残る同志との間に、党的展望の一致ーー出撃した同志がきりひらいた全内実を、残留同志が、党的に継承発展させていくという関係ーーを確立できず、それゆえ、戦場に出る同志が残留同志にあとを託して戦闘に全力を傾注することが出来ない、という危機に、我々はおちいつた。（この危機は、端的に、Y委員長、RG隊長への諸矛盾の集中としてあらわれた。）ここに、BL派の団結の浅さが露呈し、BL派の一〇、二一への進撃は、中途半端なものとなつた。このことは更にRG諸同志を混乱させることになつた。

しかも、BL派責任者としての私の対応は、BL派のかかる危機をなによりも一層促進させた。

すなわち、BL派の団結を鋼領的II党的次元にまで深化させる闘いーーゲバルト的党内闘争、党派闘争、そしてなによりも、限られた時間内での安保決戦への準備に全力を投入してきた過程において、かかるフラク深化のための闘いは、極めて困難ではあつたが、しかし、出獄できたのが六月中旬であり、党内闘争において圧倒的に立ち遅れ、六月末のBL派結成も主体準備的には、（客観的必要性ではなく）早期的であつたことをふまえるならば、逆にフラク深化への闘いは、決定的に重要であつたーーを目的意識的に追求せず、かつ、一〇、二一を前に、BL派のかかる脆弱性が、一〇、二一後の党的展望問題として表面化した場合においても、私自身、このことを強力になしとげようとはしなかつた。私自身についてより詳しく明らかにするならば、まず第一に、我々は、「闘わなければフハイする。闘えば壊滅させられるかも知れない」状況にあるということの提起。

第二に、我々は、かかるのつびきならぬ状況にあつて、戦闘の道を選ぶ。革命的左翼としての我々は、戦闘を通しての勝利進撃の可能性を追求するのみであるということ。右派には、機関掌握力なく、従つて、我々の進撃IIブントの革命的発展か、我々の革命的敗北IIブント壊滅か、いづれにしても、ブントの命運は、我々にのみにぎられていること。

そして、第三に、このことをやりぬくための我が同盟、より具体的には、その指導部を引きうけたBL派の鋼領的基調は、九回大会決定であること。ーーだが私は、この九回大会路線を、我々BL派から再度主体的にとらえ返し、BL派路線として主体化することを

なしえず放置したままであつた。従つて、私自身が主観的にBL派の基調を確認していても、それが全体的なものにはならず、それどころか、私自身が勝手に確認ずみのこととすることによつて、BL派の基調、BL派全体の鋼領的II党的団結の深化がなされないままとなつてしまつた。つまり、フラクの思想的鋼領的一致の獲得を、公的文書の公的会議での採択決定に委ねるという、自己の組織内ポジションからの自然発生性として一種の主流派政治におちこんだのであつた。かくして、私はBL派を結成当初の安保決戦術論の団結次元から深化させることに客観的には、無力となつていた。

だが、このことをハ握できないなかつた私は、一〇、二一直前の我々BL派内部の討論において、討論が一〇、二一攻防の問題につまるのではなく、一〇、二一以後の同盟の党的展望の問題云々となることに単純な戦闘回避の「日和見主義ではないか」という感覚的思考に終始してしまつたのであつた。

一〇、二一における我が同盟は、完敗であつた。わが同盟再建以来類をみない惨敗であつた。

我々は闘つて敗北したのではなかつた。闘いえずして敗北したのであつた。

我が同盟の中途半端性は、権力の空前の首都ロックアウト体制の前にあばかれ、武器調達、戦闘地図作成、作戦、部隊移動、指導体制等々、我々は、あらゆる点で、敗退した。

しかし、我々の完敗は、我々の「軍事を組織する党」を基軸とした我々の武装闘争論の敗北ではなかつた。我々は、完敗の中で「軍事と地区党」ーー「軍団論」について一層、その決定的重大性を確信し、実際、この我々の提起に反対であつた情況、反旗派においても反旗派は、軍団建設論にのりうつる等、右派の部分的解体によつても、この確信は、検証されたのであつた。のみならず、このように、全同盟的に「軍事を組織する党」への飛躍が追求されることの中で、我々は、軍事、軍団問題における我々の従来的対応について、その弱点欠カンを積極的にとらえかえし、その克服を目ざしていつた。とりわけ、軍団建設について、RG後先論から、RG——AIF（Y—地区Y）の同時併行的建設（軍の再生産構造）を明らかにし、軍建設における段階論を突破することによつて、同盟を軍事を接ぎ木する党ではなく、軍事をはらむ党へ更に発展させてゆくことが出来た。

しかし、かかる党形成ー階級形成論について深化をかちとりはしたが、この物質化をかちとるべき党主体については、根本的には、我々は、一〇、二一以前の状

三、日常の戦とBL派系内部の対立・分立。

「日常の日前の利害のために重大な根本的観点をこんなふうにわすれること、後日の結果をかえりみずに目前の成功をもとめねらうこと、運動の現在のために運動の未来を犠牲にすることは、まちがいなく日和見主義である。そしたこんごもつねにそうである。そしてまちがいなく日和見主義こそ、たしかに、ものごとをまちがえる意図にでているものかもしれない。……」（フルエン選集 III巻 P.386）

態を突破しえなかつた。むしろ、BL派は、一〇・二一前段で分解し、以降、敵対しないまでも、BL系諸グループとして一一月決戦へむかうことになつた。すなわち、六八年の七回大会以降、自然発生的とはいえ、それなりに、鋼領的に党的次元の問題に到るまでの相互一致をかちとつてきた経緯を同じくする諸グループに、或は、個人に、BL派は、分解した。それ故、諸グループの団結力は極めてつよいものであつた。過去の闘争歴、組織活動歴に至るまでの同一性の故に、出撃と残留の相方ともが、党的展望についてもかなりの同じ展望をもち、且つ、託しえたのであつた。だが、BL派の分解、諸グループ化によつて、一月決戦にむけて同盟をけん引するダイナミックスは、とみにおとろえることになつた。

しかし、一〇・二一の完敗は、フラク的諸問題をのりこえて、同盟を根底から問いつめた。

「一一月を闘えねば、ブントはブントでなくなる」

「一〇・二一のくり返しは、ブントの崩壊だ」という意識が同盟員をとらえ、一一月決戦への決意が、同盟の根底からわきおこりはじめたのだ。BL派の諸フラクではなく、同盟全体にみなぎるこの意欲が、同盟をはげしく一一月決戦にむかわしめた。

だが、論理は冷酷である。

旧来のように、三泊四日、又は、二三日という時代から、最底一〇ケ月の拘束が強いられる時代にあつては、闘争のけん引、計画的突撃は、単なるブント精神ということではなしえるものではない。同盟のもつ戦闘的伝統は、一一月決戦への根底の動力ではあつても同盟の計画的な領導は、同盟内の目的意識的部分によつてのみなしうるのだ。

一一月一六日―一七日決戦が近づくにつれて諸フラク、諸グループ、諸個人それぞれが、その内実をせまられた。それは、自己純化であり、純化した自己の表明、物質化であつた。諸フラク、諸グループが、それぞれの党的展望のもとに、戦闘部分と残留部分をはつきりと区別し、一月決戦への同盟の布陣を構成した。そして、この過程において、最も悲劇的であつたのは、分解し、各グループ毎に団結力を強めたBL派系の二極化だ――第四軍団と第五軍団として一一月一六日蒲田決戦に最も鮮明にあらわれた二極化であつた。実際あの蒲田決戦において、進撃か退却か、の論争は、我が同じBL派系の五軍団長と四軍団長との痛苦な対立であつたのだ。

もつとも、この第四軍団と第五軍団は、外的関係にみられたほどには、その内実を異にするものではなかつた。むしろ、BL派が分解し、BL派系として星雲

状になる中にあつて、最も決定的であつたことは、のちの早大全学委派として内部に発生した日和見主義との対決を回避したことにある。

内村を代表とするこのグループは、(のちには、安保決戦をも否定するわけであるが)攻防の激化に絶望しただひたすら、組織温存のみを追求するという腰ぬけの敗北主義者で降伏主義者であるが、五軍団のBL系同志は、かかる傾向と了重に絶縁、四軍団のBL系諸同志は、好ましくないと思いつつも、同居、いづれにしても、対決を回避。ただその形態は異なり、それが一一月決戦における五軍団と四軍団の行動様式を規制したのであつた。

BL派は、フラクの団結の浅さ故に、一〇・二一を前に、党的展望が深刻に求められたとき、BL派全体としての一致した展望をもちえず、分解したが、それはBL派が、秋期安保決戦への戦術問題を端初にフラク形成を開始したという当初に問題があるのではなく、これを端初としつつも、不断に自己の団結を深化させていくという目的意識性の欠落にこそ原因があつた。

しかも、BL派が、この結果として、一〇・二一前に分解し、BL派はいわゆるBL派系諸グループ、諸個人として、一一月決戦にむかつたわけであるが、我々は、このフラク分解過程において、その根因を徹底的に追求し、分解の必然性をむしろ徹底化せしめていくことをおこたり、分解過程を自然発生性に放置することによつて、BL派の分解を、革命的な方向にではなく、むしろ、危機的現実の痛刻な反照としこの日和見主義と清算主義を容易にBL派分解過程に浸透させることになつた。フラクは、その分解においても、徹頭徹尾、その根因が追求され、分解が目的意識的に、非妥協的におし進められるところの必然性でなければならないのだ。たしかに、一〇・二一の痛苦な完敗と一一月一六日、一七日にむけての二〇余日の中で、かかる闘いは、極めて困難であつた。しかも実際、一〇・二一で表面化した諸フラクの醜悪な思惑をみて、感覚的にはフラク言々とか、党内闘争言々のケンケンガクガクを再開したのではブントは完全にダメになるという、一種の休戦要求意識を各人がもつた。かくして我々はこの困難にたちむかわず、この感覚的直接性にハイキし、浸透した日和見主義、内発された日和見主義に対しては、態度をあいまいにし、それとの了重な絶縁、及至は、陰シツな同居を行なうことによつて、BL派系は、一一月決戦の全面的先頭に立つことは出来なかつたのであつた。なによりも、私自身、この困難にうちむかうところの「内的闘争の一層の推進→戦列強化」を追求せず、直接的な全同盟的戦列の即自的形成

の追求におちいり、タイ頭しつつある内村一派の日和見主義に対しては、かかる全同盟の即自的な団結論のワク内での対応、即ち、BL派系として確立された第四軍団が、日和見主義との陰シツな同居を余儀なくされていることにほとんど関与もせず、もう一つのBL派系軍団（第五軍団）指導部建設に着手したのであつた。私は、単なる一一月決戦の戦術だけでなく――しかし、これは、決定的だ――綱領的II党的次元における諸問題においても最つとも近い一致にある諸同志（しかし、この強固さは、過去の同盟内組織活動における同一性等の条件の中で形成された自然発生的なものであつたが）との団結をもつて五軍団指導部形成に力を投入したのであつた、そして、五軍団は、戦闘において意識性を鮮明にした。しかし、かかる現実はBL派責任者としての私が、フラクとしてのBL派をその結成から分解、そして分解後の全ての過程において、自然発生性から脱却せしめえなかつたこと、この意識性欠如の結果としての否定的現実であるということをこそ私は、自己批判として明らかにしておく。

四　「党の革命」における位置喪失

「ただかれらがわすれているのは、自分達自身もこれらの言辞にやはり言辞以外のなんにも対置していないということ、そしてこの世界の言辞を攻撃するだけでは決して現実的な現存世界を攻撃することはならないということである。」

（ドイツイデオロギー　岩波文庫版　P二三）

我々は、蒲田駅頭にまで進撃した。権力の戦略的体制の中で、蒲田駅頭にまで進撃しえたのは、我が同盟と中核派のみであつた。

しかし、我々は蒲田まで進撃したとはいえ、その内実は、既述の通り、進撃一直線ではなく、なかんずくBL派系内部の対照的な分立をはらんだものであつた。我々は、持てる全力量を顕現せしめたわけでもなく、「闘い抜いた」という言葉で形容できるものでなかつた。我々は本来的には、もつと闘うことが出来た。

だが、たとえ、我々が、我々の全力量をもつての軍事武装闘争を敢行しても、やはり、一一月決戦は、我々の敗北に終つていただろう。従つて、結果は同じことになつていたろう、ということから論ずること自体意義のないことに思われるかも知れない。

しかし、七二年にむけて新たな出発を開始しつつある我々は、一一月における我がBL派系諸グループ間の対立、分立の意味について、断じて曖昧にすべきではない。実際、戦闘回避、組織温存主義の内村一派の主張が、もし、一一月の方針として普遍化されていたならば、我々は、何よりも、闘かうとしない自己への

限りない嫌悪によつて、自己崩壊したであろう。戦闘的伝統を誇る「ブント」は恥をもつて狂い死んだであろう。

BL派は、安保決戦の試レンにたえず、分解した。より正確には、綱領的II党的問題への一致をもはらんだところの高次の質の団結が問われたとき、BL派は諸傾向に分解した。すなわち、このことは、BL派がかかる高次の団結を、フラク全体の同一性として、あらかじめ、目的意識的に形成してこなかつたことの帰結であると共に、BL派の分解として形成されたBL派系諸グループの団結の質を示めすものである。綱領的II党的一致の高次性が問われるとき、我々の団結はかくも小規模でしか、その同一性を勝ちとりえないものであり、かかる高次性の水準においては、かくも、多くの傾向、展望が存在しているというわけだ。

しかし、このように、多元化したとはいえ、逆に、各小フラク化、小グループ化は、団結の質の高次化II純化の帰結であり、それ故、各小フラク、小グループの一一月へのかかわりは、極めて純化したものとしてある。もちろん、実体の小規模性は、一一月への戦術設定において、戦術のダイナミックスをかなり喪失させざるをえないし、ましてや、党的展望については、しかもちえなかつたであろう。だが、それぞれが、一一月において、各組織実体をふまえつつ、その思想的理論的内実を外化させたわけであつて、端的には、内村一派の形成過程こそは、日和見主義を全面化させたところの、より純化された、いわば、高次の（？）日和見主義への自己体系化過程としてあつたのだ。

かくして、我々に必要なことは、BL派系諸グループとして分解した我々が、それぞれ、自己の団結の質を一層高次化させ、チ密化させる闘いを目的意識的に設定しつつ、それを形態的には、他グループの解体打倒による自己の普遍化、自己の内実をもつての全同盟の「制圧」の過程として勝ちとつていくことなのだ。

それは、我々が、敗北の痛苦をふまえ、新たに、コウ常的武装闘争から内戦にむけた七〇年代階級闘争の地平を切り拓くための根本前提として勝ちとらねばならない「党の革命」において、まず、最初に遂行すべきことであつた。

だが、我々は、叛旗、情況派との敵対関係の直接性の中で、内村一派との対決を、極めて政治力学的判断から回避し、BL派系諸グループの即自的団結をこい願つたのであつた。

だが、何よりも、第一に、党内闘争は、自己の陣営

十月一六日蒲田決戦において、特定のメンバーを除き蒸発してしまつた情況派は論外であるが、従来の同盟内諸フラクを点検するとき、ーーとりわけ、わがBL派系についてーー左派を任じたものが、必らずしも、戦場において、戦闘的であつたわけではなく、一月決戦以降、いわゆる「左派右派論」は意味をなさなくなり、それは、階級攻防戦における実践的対決でなくせいぜい、使用言語上のコウ軟的相異にしかすぎないという観すら呈することになつていたのであつた。

ところが、我々は、一一月以降も、内村一派との正面対決を回避し、それどころか、内村一派が、いよいよ激しく、いよいよ公然と活発な動きを示したにもかかわらず、BL派系としてこれと同居、又は、これの無視を行なつた。それは、BL派系諸グループが、革命的自己再生をとげるための条件の最終的喪失となつた。

四軍団に所属した精鋭、RG諸同志は、四軍団のブレにおいて消滅し、かくして、言辞上はともあれ、現実の戦闘では、右派や内村派との結果的同一性にあることに消滅を深め、それは、更にRGについての確信喪失に連鎖し、だが、RGから支部にもどつても、支部は、RGの精鋭移行による弱体化状況、或は、内村一派による被制圧状況。闘おうとしたものが闘えなかつたことから錯乱し、全く闘おうとしなかつた内村一派が、活性化。まことに、かかる総括段階の中にあつても我々が、BL派系内部においてシ烈な内部論争を回避、或は、○○同志の出獄まちの組織日和見主義におちいつたことは、革命的フラクたらんとするものとしての自己失格であつた。

ここに、BL派系は、同盟内諸同志に対する影響力波及力を著しく弱めることになつた。BL派系は、「党の革命」遂行のフラク的条件を喪失した。BL派創設の責任者としての私が、内部論争を積極的に組織し、且つ、私自身、容赦なく内部対立にのぞもうとしなかつたことは、革命家たらんとする者としての腐敗に通ずるものであつた。私は、この時点をもつて、最後的に「党の革命」を領導しうる内的条件を失つた。

「党の革命」は、他フラクとの相対的優位性によつてなしうるものではなく、革命主体としてのフラク自体の革命的内実が問われるのだ。

安保決戦以降、全体としての同盟内論争は、衰退したのでもなければ、立ち消えたわけでもなく、安保決戦を通しての諸検証をもつて、一層発展した。九回大会が確定した「軍事を組織する党」ーー世界党世界赤軍への飛躍が、七〇年代への決定的ポイントであることが、いよいよ、はつきり、確認された。叛旗派、情

況派の正体は、安保決戦を通して解体が、我が同盟の飛躍過程において絶体不可欠であることが、ほとんど絶対的に明らかとなつそ。

「党の革命」は、絶対的な必要性として、客観的には、いよいよ煮つまつた。

だが、革命主体なき「党の革命」。

とはいえ、「党の革命」は、それなりに進展はした。すなわち、一方における情況派、叛旗派の内的互壊の進行であり、他方におけるBL派系諸グループのフラク失格をのりこえるべく今年頭より生まれた新たな諸フラク（関西、神奈川）の一定の闘いによる進展であつた。とりわけ、九回大会で確立された画期的な軍事は、BL派解体によつて、関西フラク諸同志がそのほとんどを維持強化し、「党の革命」を推進することとなつた。

だが、求められているラディカルな「党の革命」は強固な主体の形成によつてのみなしとげられる。そして、その主体は、今春頭、いわば、外から形成された。

出獄を勝ちとつた東大闘争、四二八闘争諸同志は、まず内なる日和見主義と対決した。いわゆる左派が、まず、自己を純化しなければならない。内村一派は容赦なく粉砕された。革命的フラクの形成が開始された。そして同盟内闘争は、新たな段階をむかえた。「党の革命」は、そのダイナミックな進撃をはじめ、全同盟が新たな流動に入つた。だが、自己分解を自己純化としておしすすめえず、なかんずく、内なる日和見主義との対決を回避したわがBL派（BL派系諸グループは、それが故に、この新らしい段階においてはただ、外からの解体作用を一方的にうけるのみとなつたのであつた、そして、我々は、この解体作用を、「始元」からの総括にむけた現実的端緒として主体的に把握する。私自身、第五軍団として表明した自己の更なる展開に入る前に、「始元」への立ち帰りとそれを通しての自己の現在の対象化を行なうことが絶体不可欠として、「解体」をうけとめている。

五、革共同イズムの世界

「……観念主義「イデオロギスムス」がゆきわたり、弁証法は誤つた適用がなされている。ヘーゲルは決して多数の「事例」の普遍的原理への総括をもつて弁証法とは名ずけなかつた……」

（マルクスからエンゲルスへの手紙　改造社版　マルエン全集　一八巻　P四三二）

現在、「党の革命」は、改革や改良ではなく、まさしく、革命として激しく進行している。そして、この中にあつて、あらためて党の革命とはなにか、――同盟をどのように革命するのか。そもそも、同盟とは

何であつたのか。革命は根底的でなければならず、ことに同盟一〇年が、対象化されなければならない。実際、我々が、党の革命というとき、その党は、ブント一〇年であり、この革命だ。しかも、革命は、同盟の組織諸形態諸機能の革命ではなく、同盟一〇年の思想方法の根底的な止揚とその外化としての組織諸形態、諸機能の新らしい構築である。

「ブント主義」と「革共同イズム」ーこれこそ、革命的左翼一〇年を貫らぬいてきた二本の糸である。

革マル派。この「革共同イズム」の権化は、一〇、八以降、口をきわめて「ブント主義批判をくり返してきた。

「一〇、八」こそは、彼らにとつて、その昔七年前、彼らが解体したはずの「ブント主義」そのものの強大化された再生であつた。倒したはずのものが、生命力に満ちあふれて存在しているではないか。それどころか、一〇、八以降、ブント主義は、彼らの主観的願望をシリ目に、壮烈な進撃を勝ちとつているではないか。

まことに、彼らにとつて、一〇、八以降二年有余の厳しくも荒々しい日本階級闘争の暴力的前進、全戦闘は革共同イズムにおいては、主体化しえないものとしてあり、革マル派は、一種特有の強迫観念にかられてきたのであつた。

一体全体、彼らが「ブント主義」というとき、それは何か。

革マル、日ク、「武装ホウ起主義」「革命主義」

いかにも我々は、断乎たる武装ホウ起主義であり、鋼鉄の革命主義である。我々の闘いの一切を武装ホウ起、革命の一点にむけて集中できない組織がどうして革命党たりえようか。

第一次ブントは、安保後、革共同イズムの強い作用を受けて分解した。我が同盟の一部は、革共同に吸収された。だが、今度は、革共同イズムは、ブント主義の強い規定性をうけて二分解した。

我々はここにおいては、革共同の二分解にはふれないが、我々が、革共同との対決において、革共同イズムを否定して、ブントの継承、第二次ブント結成を勝ちとる闘いをはじめた所以は、明らかにしておかねば

ならない。

革共同イズムの現象的特徴は、戦術右派、組織温存主義として集約される。

史的唯物論において、ミーチン、スターリン流の客観主義を克服し、梅本、田中吉六等と共に、主体的唯物論を構築した黒田寛一の理論が、それでは何故、このような右派保守主義としての現実的帰結をえるのであろうか。

それは一言にしていえば、その立脚点主義にある。

黒田理論の特質は、現実の階級闘争において、史的唯物論をつかみとるという、いわゆる「読み込み」ーヘーグル流にいえば、形成的悟性ーにある。すなわち、彼らにおける現実とは、史的唯物論の場所的現在への概念的上向としての具体的行為的現在ではなく場所的現在の中に史的唯物論の貫徹を見るところの形式的悟性ー理由づけの「鍵」ーなのだ。たしかに、黒寛理論は、史的唯物論のいわゆる「エレメント」としての労働論を基底にした上向展開としての史的唯物論の概念的構成を行なつており、たしかにそれは、決して単純な形式的悟性、「理由づけの思イ」としてあるのではない。だが、黒寛の史的唯物論は、史的唯物論の具体化としての資本論に概念的に上向するのではなく、ここにおいては、方法は、全く転倒し、資本論の中に史的唯物論を読み込むところの悟性主義、解釈主義に堕している。（論文構成的には、史的唯物論から資本論への上向となつているが、その無媒介的直線矢印的上向は、解釈主義を陰ペイするための形式的逆順列にすぎないことを示している。）かくして、黒寛理論は、主体的唯物論としての立脚点の構築はあつても構築した立脚点の場所的現在への行為的具体化としての戦略、戦術、運動組織論がない。階級闘争における現実的指針については、例えば、ブント、中核等の八派や、社共、総評の動きをつかみ、闘争の「成りゆき」に対する全体的見通しを立て、闘争をあらかじめ植ぶみし、（革マルが情報収集に熱心なる所以）その上に立つて、自己の闘争方針を経験論的にたてる。いわゆる最先端に立つことを避け、第二戦線につき、いつでも「のりこえる」「ふみこえる」ことの出来る位置を確保するというわけだ。革共同イズムにおける戦術、運動組織論は、それ故、極めて技術主義的、経験主義的なものであり、戦略に至つては、かかるものへの関心すら論理的には形成されていない。代々木との対決の際、ブントの社会主義革命論に対して、黒寛が民主々義革命論をそのまま踏襲したのは、決して偶然ではない。実際、革共同イズムにおける現実的階級闘争の領導とは、かかるものとして、情報収集と組

識の温存拡大以外にはなにもない。

我々における階級形成とは、階級意識論が単なる認識論でなく、主体のかかる認識深化における実践的存在形態の高次化としての階級闘争の発展として、即ち認識論、実践論、階級意識論、階級闘争論としての階級形成として定立されているのに対して、革共同イズムにあつては、階級形成論は、いわゆる自覚の論理として、立脚点の構築と現実の中にこれを読み込み自覚していくものとしての純粋意識論でしかなく、プロレタリアートの現実的実践的存在形態としての階級闘争の現段階とこれの内容としてある階級意識の現在的成熟ー後者の外化としての前者ーを強引に解体させ、階級意識を学習、自覚の問題に階級闘争を経験主義に機械的に二分化し、後者を、学習拡大のための草刈り場としての無理、非論理の世界にしてしまうのだ。

六　ブント主義と党

「　もし事物の現象形態と本質とが、直接に一致するならば一切の科学は不要であろう。」

（資本論　第三巻　P一〇二一）

革共同イズムの非戦闘性は、まさしく、彼らの論理的体質そのもの、すなわち、悟性主義、解釈主義そのものにある。立脚点の現実化ー史的唯物論の具体化としての資本論、帝国主義論と、それにもとずく戦略戦術、運動組織論への論理的上向がくして、ここにおいては、闘争の指針は、論理的なものとして非妥協性、戦闘性をもつ。ーではなく、現実の内に、立脚点の正当性を論証し、史的唯物論の貫徹を読み込むという解釈主義。我々は、このようなものを「立脚点主義」と呼ぶ。そして、その立脚点主義が、いかなるものであつたかは、一〇、八以来の二年有余が示している。実際革マル派は、一度たりとも、日本革命運動の新たな地平を切り拓いたことはなかつた。!!

ところで、革共同イズムとの対極としての我がブント主義は、如何？

ブント主義は、一〇、八以来、日本革命運動の暴力的進撃の基軸として自己を貫ぬいてきた。我々の戦闘性は、「革命的」ということの基軸を、国家権力との関係、すなわち、「国家と革命」としてとらえ、まさしく、階級形成を単なる意識＝自覚の問題としてではなく、その意識存在の権力に対する闘争の発展＝階級闘争としてハ掘してきたところにこそある。

だが、我々が現在、明白にしなければならないことは、かかるものとして形成された第二次ブント自体の対象化であり、事実、このことをぬきにしては我々自体七〇年代階級闘争を領導しえないというところにまできているのだ。

我々は、六六年九月、同盟統一再建第六回大会を序に、六八年三月の第七回大会をもつて同盟第二期を切り拓いた。

同盟第七回大会をもつて鮮明にした「プロレタリア国際主義と組織された暴力」は、過渡的世界における「国家と革命」の世界プロ独にむけた世界同時革命戦略に基づく具体的普遍化であり、それは、一〇、八以来の日本階級闘争を内在的にけん引する基調として画期的なものであつた。同盟のこの提起は、まさに、全革命的左翼を理論的に領導する同盟の位置を誇らかに示すものであり、「理論戦線」八九号、「共産主義」一三号（九回大会）は、我々の理論の現在的到達点である。（ちなみに第一次ブント第四回大会綱領草案とも対比せよ。）

だが、我々は「プロレタリア国際主義と組織された暴力」の画期的な基調提起に拘らず、七回大会以後（六八年三月）、七月全学連大会をめぐる同盟内大混乱、一〇、二一ビン使用をめぐる論争を端緒に、東大闘争、四、二八闘争、アスパック闘争等々、同盟内は、混乱を深めこそすれ、求心的団結に向うことがなかつた。それは、各中央委員会及び八回大会等同盟最高諸会議の内実に端的に示されてきた。

昨年五月の三中委の分解と、六七月における同盟内

問題は、同盟のかかる分解的内実が、四、二八敗北と秋期決戦到来というのつびきならぬ事態の中で、一挙に表面化したものであつた。

たしかに、我々は、革命的高揚は、革命組織を団結させるはずだ、というものではないし、むしろ、高揚激動こそは、革命組織間　及び内における論争、対立闘争を激化させるものであることをこそ指摘しなければならない。しかし、同盟における分解、混乱は、かかるものとして一般論的に論じられる位相のものではない。

権力が、我々に対して、本格的な弾圧を開始したのは、六八年一〇、二一であつた。

一〇、八以来の攻防において、革命は、反革命の成長以上に強力に発展し、一〇、八来の一年間において、まず第一に、革命的左翼が、極めて攻撃性に富んだ武装闘争力をたくわえるに到つたこと、しかも、第二に、革命的左翼は、学生を広範にその戦列に獲得しただけでなく、青年労働者を大きくその戦列に獲得しはじめたということ、これらの点において、権力は、我々を、正真正銘の革命派として認知し、それ以前のごとく、例えば、代々木と革命的左翼のキッ抗的関係、敵対的抗争の力学的利用等々の策を一切とりやめ、我々に対する正面からの弾圧に全面的にのりだしてきたのであ

つた。

一〇、二一こそは権力が首都を戒厳的状態にした最初であり、大量逮捕にふみきつた最初でもあり、新宿に対しては、騒乱罪が摘用されたのであつた。だが、我々は、かかる権力の全面的正面弾圧、弾圧の質的強化にも屈するとゝなく、更に東大闘争を闘かい、四、二八へと進撃したのであるが、一〇、二一以降の本格的弾圧は、我が同盟を根底的にといつめた。

一〇、二一のビン使用をめぐる論争は、この根底的問題を直感的に反映した論争としての性格を有していた。

論争は、従来からの、いわゆる左派と右派との対立としての内実をふくみながらも、しかし、単なる階級形成、戦術論上の論争ではなく、党形成上の諸問題を直感的にふくみいれた論争であつた。すなわち、一〇、二一戦闘が、不可避的にそう遇する権力の全面的弾圧、攻撃を更にうち破り、戦闘が切り拓いた地平を更につき進むための党的条件の早急の確立の問題を内に含んだ論争であつた。

実際、三泊四日、又は、二三日でもつて釈放されてきたところの闘争から、相当長期の被拘留と組織弾圧が、予測出来る段階に到達した地点において、従来のごとく、単に、「闘えば、展望が開ける」というその日暮し的な発想――闘争で組織が壊滅しても二三日後の戦闘メンバー、指導者の復帰＝再建となるわけで、このように「百度壊滅　百度再建」可能な条件下にあつては、常に〝全てをかけて闘う〟ことが革命運動をラディカルに発展させるかのごとくなる――にあつては、階級闘争を、これ以上発展させる出来ない、という予感こそ、一〇、二一、ビン論争の基底にあつたのであつた。

すでに、一〇、二一、以前においても、同盟の、なかんづく、学生細胞同盟員のシ烈な戦闘性の波及、組織化として、かちとりえず、わが同盟においては、学生運動からはじまつてそこに終るという円環性におちいつていることについての認識――つまり、学生の戦闘の党による継承としての労働者階級内部への進撃の問題――が提出されていたが、一〇、二一、以降の反革命との正面対決戦は、そもそも、戦闘そのものが強固な党的バックアップを必要とすること、且つ、出撃した戦士は、二三日ならぬ長期拘留によつて、その戦闘の成果を直接的継承発展させることが出来ない以上、階級闘争の継承的発展、進撃の組織的保証、組織的展望が絶対的な前提となること、を我々につきつけた。すなわち、「革命闘争の時代＝革命党の時代」として「革命党なくして、革命運動なし」ということが、鋭く我々にせまつたのであつた。

だが、なによりも中央機関にあつた私自身、この「党の」問題について　ぼうばくとしたつ握しかもちえず、一〇、二一、ビン論争においても本格的弾圧に耐ええない我が同盟の現状の指摘とそれについては全く無関心でただ戦術論の次元――それも、左翼的でありたいという心――からのみの問題提起や、或は、主体の条件をぬきにしたところのいわゆる「情勢分析＝必要性」を説き、なんとかやろうという提起（従来の学割の時代には、主体的条件ぬきに闘つて敗北しても、どうせ二三日釈放で戦線復帰できた）に対する強い反バッのあまり、問われている問題を根底的体系的に提起しえず、丸太、ゲバ、石による徹底的な肉弾突撃戦を強調するという消極性に陥つたのであつた。

一〇、二一論争は、たしかに、根底的問題が直感されつつも、しかし、結局、従来通りの戦術論争に終り、しかも、防衛庁攻撃の戦略的正当性と、なによりも千余名の武装部隊によるカ烈な防衛庁正面攻撃、中央権力闘争の貫徹は、かかる根底的問題を後景においやつた。そして、東大闘争においても、四、二八闘争においても、やはり、全同盟的に表面化されることはなかつた。にも拘らず、問題は一層深刻化していつた。

我々は、攻防激化において、強化された反革命をうちくだくべく、一層、強烈な戦闘を貫徹する。我々の戦闘は、強い衝撃力をもつて、革命的左翼、反戦全共闘を更なる闘争にかりたてる。だが、戦闘のたびに、同盟の誇るべき最精鋭の戦士が、次々獄中につながれ、逮捕された同志のあとがうめられ更に組織が強化されるのではなく、同盟は、一方的にやせ細るのみ。縮少再生産。いや、決定的なことは、かかる量の問題ではなく、同盟の非有機性、つまり、質的ゼイ弱性だ。陰ペイされ、内攻していたこのことは、四、二八後、破防法攻撃を受けて一挙に表面化しはじめた。

我が同盟にとつて破防法攻撃は、我が同盟が革命党として認知されたものであるなどという革命的ゆとりを示めせるものではなかつた。

逮捕状が出ているとされていた六名の同盟中枢＝さらぎ、松本、一向、久保井、田宮、三上＝の地下潜行は、党的組織構造のゼイ弱な我が同盟を、たちまち機能マヒ、機構解体におとしいれた。かくして、四、二八敗北の総括、せまりくる秋期決戦への展望をめぐる討論、論争は全く盲目的でしかありえなくなつた。

我が第二次ブントは、「プロレタリア国際主義と組織された暴力」の基調を提起しつつも、それが、対権力闘争としての対象的領域においてしか提起できず、との「プロレタリア国際主義と組織された暴力」の闘いを組織し領導する党主体については、闘争における

る指導性として階級形成論的次元でのハ握にとどまり、初期マルクス主義」に対して、「マルクス主義なきレーニン主義」といわれる。党自体の内在的精造がとりあげられ、それ自体が対象化されることがなかつた。

だが、六八年一〇・二一以降、とりわけ、六九年四・二八敗北後、権力と党がもろに対決する革命的闘争の時代にあつて、かかる党形成なき階級形成は、全くの手づまりに来たのだ。実際、昨秋の痛苦な敗北は、昨夏段階からの総括で解明されるものでなく、第二次ブント、更にブント主義の全面的対象化を通して解明されるものとしてある。我々は、このことを、既に遅きに失したとはいえ、昨六七月に悟つた。だが、赤軍派、叛、情況派との党内党派闘争においては、ブント主義そのものを対象的に措定するところの根源性をもつてではなく、秋期決戦戦術をめぐる対決からはじまる戦略戦術的対決、それも結局は、決戦戦術をめぐる対決に終つてしまつた。しかも、かかるブント的体質の明確な自己止揚は、九回大会においても決定的にはなしえず、（党形成が意識化されてはいたが、今なお「戦略戦術の党」の論理構造を止揚できていなかつた）安保決戦敗北後において、まさしく、第二次ブントから第三次ブントへの飛躍の問題として、根底的に措定されることになつたのであつた。

ブント主義は、革共同イズムの「レーニン主義なきレーニン主義」といわれる。

ブント主義の特質は、立脚点、世界観をそれ自身として主体的ハ握するのではなく、それを階級形成論に具体化しようと試みる。党的一致を、具体的世界に対する現実的指針の一致をもつて勝ちとろうとする。立脚点、世界観をそれ自身としてではなく、それが、現実の階級闘争への指導性としてはどのようなものであるのか、という場所的現在へ具体化されたものにおいてハ握する。

たしかに、もし、立脚点、世界観の全内実が、直ちに場所的現在に全面具体化されるのであるならば、立脚点、世界観それ自身として言々することは、無ダな思弁であり、実際、極度に抽象化された次元における党的一致の獲得よりも、具体的次元におけるそれの方がずつと正確であり、且つ、有効であろう。

しかし、立脚点、世界観は、その内実を、具体的な戦略、戦術、運動組織論として場所的現在化させるがそれは直ちに全内実の具体化ではない。この限定されぬ場所的現実の中に、立脚点、世界観の全内実が具体化されえず、それ故、現実的一致、即ち、立脚点、世界観の全面一致とは、規定できるものではなく、ましてや、ある局面的現実に対する戦術的一致なぞは、マ

ルクス主義的世界観と非マルクス主義的世界観の場所的現在における交互点――これが存在するが故に、統一戦線がありうるのだ――である場合をも含んでおり、従つて、かかる局面への戦術的一致は、到底、党的一致を保証するものではない。事実、局面の新たな次元への展開においては、かかる戦術的一致のみによる党は、その根源的立脚点の相異の敵にたちまち、解体することとなり、まさしく、党は、「過程としての党」なる姿を示す。

すでに、この間、明らかにされて来たように、党とは、戦略戦術の党ではありえない。我々は、党という場合、それは、単に戦略戦術の一致のみならず、それらをうち出すところの根底である立脚点、世界観に致るまでの内的一致をかちとつたものでなければならない。立脚点主義の党は、何よりも現実を具体的に変革しえないという意味で結局、論外となるが、立脚点なき党は、真実には、党であることが出来ない。我が同盟一〇年の総括を通して、同盟の革命的立脚点、世界観の鮮明化が問われる所以である、そして、この立脚点、世界観の構築、鮮明化の力は、思惟力である。

思想、理論を体系的ハ握するのではなく、CSパース等のいわゆる「思想の明確化運動」流に「この理論は、〇〇問題に対しては、どのような方針をうち出せ」「この思想は△△については、いかなる回答をもつているか」等々、ひとつひとつ実用主義的、実利主義的に試問して判断していこうとすることの素町人的俗物性は粉砕されなければならない。実際、このように「具体的部分」をいくらよせあつめても部分のよせあつめはやはり部分にしかすぎず、その延長上に全体的体系的ハ握なぞはありえないし、そもそも、かかる素町人的俗物の実用主義、実利主義にあつては、世界観、思想としての体系性確立は必要でもなくなる。（政治過程論が生み出した最悪のプラグマティズム）マルクス主義の方法は、個別的具体性への規定的実践である。（右四的全体性の体系的把握をもつてすり）

ブント主義と革共同イズムは、一見不グタイ天の敵対性を示しながらも、その実は、対決でなく、相互補完性としてあり、中核派の秘密はこの両者を、機械的にうまく使いわけるところの経験主義的手腕にあるのだ。

止揚とは、徹底した対決のレン獄を通しての実践的帰結であり、対決への第三者的対応ではなく、日本革命的左翼一〇年の最セン端を切り開いてきたブント、ブント主義がその後景に必然的に発生存在させているところの革共同イズムの存在根拠の止揚、

すなわち、革共同イズムの存在根拠としてのブント

主義の止揚、ブントによるブントの痛苦な自己否定なのだ。そして、この自己否定を端緒的に開始したものこそ、九回大会であり、赤軍派、叛旗、情況派とはいづれも、かかる新たな自己飛躍を目的意識化出来なかつた部分である。赤軍派における「国際主義と組織された暴力」とは、「政治過程論」への拡大とその軍事過程論化にしかすぎない。

六、革命党史観の確立

「ーーー君の手には小銃や機械技術の最新の成果にしたがつて装備されたすばらしい速射砲がわたされる。死と破壊のこの武器を手にとりたまえ。戦争を恐れるセンチメンタルなぐち屋の言うことを聴くな。労働者階級の解放のために火と鉄で絶滅しなければならないものが、この世にはまだあまりにもたくさんのこつている。ーーー新しい組織をつくり、自国の政治と自国のブルジョアジーにむかつて、死と破壊のかくも有効な道具をもちいる準備をせよ。」

（レーニン全集　第二一巻　P二五五）

我々は、一九八一年一〇、二一以後における現実の階級闘争の中に、我が同盟とブント主義の自己止揚の必要性を明らかにしてきた。

だが、我々は、党形成を、現実の必要性から、或は現実的機能から規定してはならない。かかる機能、必要性からいくら強固な党形成論が規定されても、それは、党形成の本質論的ハ握ではない。我々の自己止揚とは、階級闘争史観の規定性上に党形成論を位置づけるのではなく、階級闘争史観の転倒、即ち、革命党史観による階級闘争への規定性、かかるものとしての党形成の主体化なる自己止揚なのだ。（この点について私自身、九回大会時は、もとより、今年頭にいたるまで極めてあいまいであつた。）

レーニンは、「革命的理論なくして革命運動なし」と簡潔に述べたが、これは、まさしく、組織論的には「党なくして革命運動なし」ということだ。

たしかに、革命党がなくとも、現実の階級闘争はある。しかし、党に領導されない自然発生的闘争は、それ自体において、革命運動に発展することは出来ない。そもそも目的意識性とは、自然発生性の先取り意識のことではない。いわゆる階級闘争形成党派の致命的誤ビュウは、階級ー労働力商品の論理的自己展開の延長線上に革命を――――つまり、自然発生性の直接延長線上に目的意識性を――――措定するところにあり、かくして、党は、この論理の不純化やブレを廃し純粋展開をなさせしめるための媒介として位置づけられることになる。たしかにもし、革命がブルジョア革命のごとく、新しい下部構造形成の先行性（それに照応する上

部構造の革命）としてあるということは、とりもなおさず、党は、自然発生的必然性としてあるこの移行過程を純粋迅速に展開せしめるための媒介であればよい。しかし、プロレタリア革命は、下部構造の先行性と、それに照応する革命としてあるの点ではなく、下部構造、それ自身としては、円環性であり、資本主義的悪無限でしかありえない、経済法則に規定されたプロレタリアートII労働力商品の自己運動としての自然発生性である。

目的意識性とは、いわゆる経済法則とこれに規定された自然発生的階級闘争の根底の科学的ドウ察としての「労働力商品化」の易出とこの廃絶を目ざす闘争、その第一歩としての権力奪取なのだ。目的意識性とは、かくして、科学に媒介されたところの、プロレアリアートの自己対象化とそれを通しての向自的自己否定、プロレタリアートの世界観である。そしてプロレタリアートの世界観こそ「党」こそは、向自的プロレタリアートの最高の結晶である。だが、プロレタリアートの世界観は、観念としては、鮮明に確立されてはいても、それが、党内において、あらかじめ実現することが出来、それを階級全体におしろげていくということではない。党は、実現した組織ではなく、実現をめざす組織であり、実現は、世界過渡期、世界社会主義、世界共産主義としてのみ実現される。

ところで、我々の提起に対しては、その対極として「ソビエトIIプロレタリアートの最高の団結の形態」なる主張が存在する。

たしかに、ソビエトは、実体的にはつて（とりわけ先進資本主義国にあつては）形成される。だが、実体即ち、本質ではない。

我々は、すでに、即自的プロレタリアートII労働力商品意識についてふれてきたが、プロレタリアートは更に現実的には、他の諸階級諸階層イデオロギーの流入をうけて、いわば、ブルジョア社会における諸イデオロギーを、内在している。統一戦線とは、プロレタリアートと諸階級諸階層との実体的統一戦線であるとともに、その内化としての、諸プロレタリアートの統一戦線なのだ。

我々が、階級闘争を通して構築するソビエトは、かかる統一戦線の組織的発展であり。ソビエトは、革命的高揚の中で、一瞬、プロレタリア意識によつて満たされてはいるが、しかし、武装蜂起においても、なおその意識は、部分、即ち、ソビエト内の革命党員及びそのシンパとしてのみ表現される。

我々は、プロレタリアートの階級形成を、プロ独裁立をもつて完了とする俗見を突破しなければならない。

プロ独樹立に、決定的であつても、今なを、階級形成上の過渡である。

だが、このことを、握せず、プロ独＝階級形成完了とする俗見に立つ時、ソビエトは、論理的必然的にプロレタリアートの最高の団結形態と主張せざるを得ないのであり、且つ、この完了点における階級（＝ソビエト）と党との歴然たる相違から、階級と党は別個として、しての区別が強調される。そして、結局、党とは何かということが不分明となり、党を媒介と措定するか、或は、二者併行的な階級形成と党形成の二元論的強調、つまり、両方とも必要という外在的な主張となる。

ここで、我が同盟に決定的な影響を与えた藤本進治について――とりわけ、難点について――ふれておくならば、その階級　形成史観（この純粋実践化としてのサンシカリズム＝京大パルチ　等）、及び、階級形成をプロ独樹立をもつて、それも、一回的規模においてすでに完成とすることの打破が明らかにされねばならない。

最高の階級形成とは、階級形成の最後としての階級消滅である、プロレタリアートは、世界社会主義に至る観が自己を物質化する過程であり、まさしく、理論が概念の自己止揚、自己の人類史での普遍化であり、全てが党からの規定性をうけ、そうであるが故に、党

更に、分業の廃絶をもつて世界共産主義へ向かう。それは、プロレタリアートの世界観が、自己を実現する過程であり、具体的には、党が階級全体の内に自己を実現同一化する過程である。そうだ、究極的には、万人が党員、共産主義者になるのだ。

党＝プロレタリアートの世界観が、階級内部に多数派として自己実現を勝ちとるとき、それは、階級形成上の新たな地平、すなわち、プロ独樹立として外化させる。そして、世界過渡期を通しての党の更なる自己実現、世界共産主義の第一段階としての世界社会主義における党、階級の内的同一性形成、すなわち、階級概念の人類概念への現実的止揚、党、ここにおいても、党と階級は、直接的同一性ではなく、それは、世界共産主義への進撃を通して確立される。（ところで複数党の問題が提出される。だが、現実に、党が複数あるということは、プロレタリアートの世界観が複数あるという相対主義を正当化するものでなく、それは唯一の世界観＝それ故、唯一党＝獲得にむけた過程的現実であるということだ。）

革命運動とは、確立されたプロレタリアートの世界観が自己を物質化する過程であり、まさしく、理論が現実にせまること、党が階級を獲得する過程をかず

が、科学に媒介された自己純化されることを絶対必須の不可欠とするのだ。

我々は、昨秋安保決戦敗北の総括の基軸を党形成、党建設論としたが、それは、まさしく、階級闘争史観の革命党史観への止揚を根底とした革命党建設＝第三次ブントへの飛躍＝として主体化されねばならない。そして、この革命党の過渡期世界における具体的形態こそ、「世界党、世界赤軍」＝「軍事を組織する党」である。

我々は、革命運動の鉄火の中から、当初、機能的形態的に軍事を組織する党へとアプローチし、事実、昨秋安保決戦は、この軍事を組織する党の意義を鮮明にし、且つ、現在、実践的に問われている。しかし、「軍事を組織する党」は、単に、現下の階級闘争の深化における問題として位置づけられたのではなく、まさしく、それは、現代過渡期世界における世界同時革命戦略に規定されるところのものである。「帝国主義戦争を内乱へ」ではなく、その前段階歴史局面、即ち、＝「帝国主義の侵略反革命を世界革命戦争へ」転化させる＝帝国主義軍隊解体＝ための革命正規軍創出として。我々は、軍事を戦略的に位置づけ、だからこそ、それは、「世界党、世界赤軍」創設の闘いとしてある。

現在、日本革命運動において、地下軍事組織は、三つ。一つは、我が同盟のそれであり、他に、赤軍派と京浜反戦団の二つ。そして、赤軍派、京浜反戦団は、すでに、官憲によつて壊滅せしめられた現下、地下軍事組織は、唯一、わが同盟内に存在するのみとなつた。

官憲は、我が同盟の地下軍事組織の解明と追及に全力をあげている。日本革命運動の深部において、我々と官憲、政治警察との執念に満ちた闘かいが続いている。闘いは更に激化し、深化するであろう。

軍事を組織する党としての地下軍事組織の建設開始は、軍事武装戦　、武装蜂起への着手であり、であるが故に、権力の追及は、質的に高次である。

だが、現代革命の現実性は、この権力の厳しい追及弾圧をよせつけず、深く広く地下軍事組織を建設することを基底にして獲ちとられる。

いわゆる、先進資本主義国の革命運動は、この地下軍事組織の革命的意義を忘却して久しい。

バブーフ、ブランキー、バクーニンの名前は、通常、「陰謀家」として片づけられる。

たしかに、然りだ。我々も、九回大会時、彼らの単純軍事力学主義を明らかにし、これを否定した。

しかし、我々は、むしろ、現在、バブーフの革命的意義を強調し、ブランキーの地下組織建設への執念を

こそ、擁護しなければならない。なぜなら、既成左翼は、もちろん、現下の革命的左翼もまた、革命的地下軍事の準備において、バブーフ、ブランキー以下だからだ。

革命運動において肝心なことは、「全体性」なる言辞をもつてする平均的総花ではなく、核心を鮮明にすることだ。

しかも、核心とは、端緒的絶対性であつて、段階論的に未来的展望として措定されるものではない。昨秋安保決戦は、我々に、このことをはつきりと教え込んだ。

地下軍事組織が、現実的な必要性として意識に上提されたとき、すでに、その建設は、立遅れなのだ。党建設を、現実の階級闘争の領導との照応で展望するところの反映論的党組織論は党建設における自然発生性として止揚されなければならない。

我々は、いまやようやくにして、第三次ブントへの論理的端緒をかくとくするところまでに到達した。

革命党史観への止揚としてかちとられるべき、党形成、階級形成にかかわる従来的思考、理論（階級闘争史観）の打破を論理的端緒に、プロレタリアートの世界観としての同盟の思想的理論的純化。これを根底としての「軍事を組織する党」――「帝国主義の侵略、反革命を世界革命戦争へ」転化する「世界党世界赤軍」建設の闘いを、我々は追求する。

我々は、いまや、「党の革命」を根源的に推し進めることが出来る。

（了）

- 944- 5040

944-5040

日C17-14